【第4回滋賀県立高等学校在り方検討委員会　開催概要】

１　開催日時：

令和８年 11 月６日（金）9 時 30 分～11 時 00 分

２　開催場所：

滋賀県庁　東館７階　大会議室

３　出席者：

［会場出席］　13 名

朝比奈委員、生駒委員、太田委員、小田委員、門田委員、
蒲生委員、岸田委員、炭谷委員、立岡委員、竹林委員、
中井委員、中野委員、森下委員

［オンライン出席］　３名

小玉委員、永浜委員、吉嶋委員

［事務局］

村井 教育長、上田 教育次長、岸村 教育次長、
武原 高校教育課長、浅岡 魅力ある高校づくり推進室長
教育委員会事務局各課、知事部局関係課





４　開催概要：

（１） 新任委員の紹介

（２） 協議

① 滋賀県立高等学校在り方検討委員会委員長の交代について

② 滋賀県における高等学校教育と県立高等学校に関する将来ビジョンについて

③ 滋賀県高等学校教育改革実行計画について

委員からの主な意見

（２）②　滋賀県における高等学校教育と県立高等学校に関する将来ビジョンについて

○　「ICT を活用した個別最適化された学習」、「多様な生徒への包摂的支援」に関わって、生成 AI を活用し、生徒一人ひとりに AI 家庭教師をつけることで、家庭の経済力や塾の有無に関わらず、また、さまざまな事情で学習に空白ができてしまった生徒への教育が保障できるのではないか。AI 家庭教師には、「知識の定着」といった役割を担わせ、教員は、生徒の意欲を引き出したり、精神的なケアを行ったり、探究の伴走支援を行ったりといったコーチへの役割に変えてはどうか。生成AIの活用により、誰一人取り残さない、経済格差に負けない県立高校ということをぜひ将来ビジョンに反映いただきたい。

○　資料中の高校生の意見を見るに、非常に、枠の中で縛られている印象をもった。社会が変化する中で、「自由と責任」という両輪を教育の中でどう教えていくかが重要である。自ら考え、自走できる子どもを育てていく必要があり、そのためには失敗を許容することが大切である。高校生が考えていることを注意深く見ながら、長い目線で考えていく必要がある。

○　連携・協働という言葉は良いが、連携先となる地域や企業、教員等の負担についても考える必要がある。ボランティアを前提とするのではなく、予算措置や教員以外の人材の配置も含めて検討する必要がある。また、「滋賀に学ぶ」ということについて、滋賀にこだわる必要はないのではないか。全国や世界に学びに行く姿勢も大切である。

○　学校の特色化を進めることで、子どもたちの選択肢や可能性を狭めてしまうことにならないか恐れている。普通科の役割も大切であり、文理を分けずに幅広い学びを提供するなど、様々な特色のつくり方が考えられる。

○　2040 年に目指す姿の「可能性を試し」という表現はイメージしにくい。「学びを通じて可能性を広げる」といったニュアンスにしてはどうか。

○　資料２－１、３の学びの「リ・デザイン」の５つの方向性について、一人ひとりの可能性に関連する「方向性②」を最初に位置付けても良いのではないか。

○　2040 年に目指す姿について、将来像に掲げている内容をもう少し反映させても良いのではないか。また、評価指標について、生徒に達成を求める基準ではなく、生徒の思いや学習環境に関する指標を設定することは良いと思う。

○　16 ページ（８）の「産業教育の充実、専門学科、総合学科における学びの充実」について、専門高校で学んだ生徒が、卒業後にどのような活躍をしているのかがイメージしにくいため見える化も必要では。

○　教員の働き方改革の視点も必要である。教員の多忙化によって子どもと向き合う時間が減り、教育の質の低下につながることが懸念される。教員にゆとりがなければ、生徒の自走を支える教育は難しい。

○　「可能性を試し」に関わって、学校は、社会に出る前に安心して小さな失敗や試行錯誤ができる場である。子どもたちがビジョンを読んだときに、挑戦や失敗ができる場であることを感じられると良い。

○「自分はこれからどうなりたいか、何を選択するとよりよく生きられるのか」を高校３年間かけて考える子もいる。

○　特色化を考える時の視点は３つあると考えている。オールインワンの学校、特定の分野を突き詰めて学べる学校、そして各校がどのように地域と連携していくのか。ビジョンは子どもや保護者、地域社会だけでなく、教員も見るものである。教員が自分も改革の当事者であると感じ、ワクワクしながら取り組めるものになると良い。また、何が変わるのかを分かりやすく示し、写真なども活用して具体的なイメージが伝わるものになると良い。

○　2040 年に向けて人口減少による人材不足が進む中、企業が高校に関わりたいという動きも考えられる。「開かれた高校」という考え方をビジョンに盛り込み、学校側も地域・企業側も無理なく連携できる仕組みづくりが必要ではないか。

○　高校生の段階では、自分らしさが何か分からない、自己分析までいっていない生徒も多いことから、「自分らしく」という表現を外すことは良いと思う。

○　デジタル社会が進展する中で、その変化についていけない人への支援や、デジタル技術の適切な活用についても考える必要がある。また、デジタル化が進むからこそ、人と対面で話すことや、校外に出て人と関わることなど、アナログ的なつながりを充実させることが大切である。

○　グローバル人材の育成については、単に英語を話せることだけでなく、異なる文化や

価値観を持つ人々と協働できる力を育むことが大切である。海外とのつながりを日常的な教育活動に取り入れていく必要がある。

○　AI 時代だからこそ、人間性や感性、相手の立場に立った共感力、情報リテラシーなどを意識して育んでいく必要がある。

○　各高校の特色について、高校生や保護者に分かりやすく伝えるため、学校ごとにキャッチフレーズやタグラインがあると良い。各高校がどのような学校を目指すのかについて、学校だけでなく地域とともに考えても良いのではないか。校長が変わっても、５年、10 年と継続できる方向性を示すことが大切である。

○　目指す姿について、「安心して」という言葉が入っていた方が良いのではないか。

○　小中学校ではコミュニティ・スクール等を通じて地域の人材が学校に関わり、教員だけでは賄いきれないところを担ってもらっている。高校でも、こうした小中学校での取組を基盤として、地域との連携をさらに進めていくと良い。

○　生徒が成長を実感することが、次の可能性につながる。生徒の成長実感を支え、可能性を広げる人たちを尊重した環境づくりの視点がもう少し入ると良い。現場で教育を支える人や地域の視点をさらに取り入れることで、滋賀らしいビジョンになるのではないか。

（２）③　滋賀県高等学校教育改革実行計画について

○　改革先導拠点校については、特色ある取組を進める拠点として、思い切った取組を進めていくことが必要ではないか。学校のマネジメントも重要であるが、教員の異動等もある中で、県教育委員会が各校の取組をマネジメントしていくことが重要である。特に改革先導拠点校については、県としてしっかりとマネジメントし、その後も拠点校が自走できるようにしていく姿勢を打ち出す必要があるのではないか。

○　文理融合については、単に文系と理系の科目を組み合わせるのではなく、経済、文化、歴史など、異なる知識や立場をつなぎながら課題を発見したりする、基礎になるような教育が必要である。

○　長浜農業高校については、滋賀大学との連携などが考えられる。彦根工業高校についても、取組の成果をどのように社会に還元していくのか、産業界がどのように関わるのかなど、具体的に検討する必要がある。